

講義録レポート

講義録コード

11-14-A-103-02

講 座	証券アナリスト	科目①	経済
目標年	2014年合格目標	科目②	
コース	1次対策・基本講義	回 数	2 回
用 途	☒ 個別DVD ☒ テープレクチャー ☐ 集合DVD ☒ WEB ☐ 衛星 ☒ カセット通信 ☒ DVD通信 ☐ 資料通信		

収録日	2013 年 8 月 2 日		
講師名	高久保 先生	講義録 枚数	5 枚 ※レポート 含まず
		補助ビ 枚数	17 枚 (サイズ)

講義構成	講義 (72) 分 → 講義 (77) 分		
使用教材	① 基本テキスト P. 3 2 ~ P. 6 0 ② 問題集 P. ~ P. ③ 例題集 P. ~ P. ④		
配布物	有 . <u>無</u> ① ②		
正誤表	有 . <u>無</u> 枚		
備考			

T A C証券アナリスト講座

証券アナリスト講義録	科目 経済	コース 1次基本	回数 2
------------	----------	-------------	---------

配布物	★ミニテスト：あり [] なし ★実力テスト：あり [] なし ◇配布物なし	★答 練：問題用紙・解答用紙・解答解説 ★その他のレジュメ []	講師 高久保 先生
-----	--	--------------------------------------	--------------

テキスト
ページ

黒板内容

1. 所得の変化と消費の変化

① 予算制約

	価格	消費量
X財	P_X	x
Y財	P_Y	y

所得：I

予算制約式： $P_X \times x + P_Y \times y = I$

予算制約線は？

予算制約線

絶対値

傾き = $-\frac{\Delta y}{\Delta x} = -\frac{P_X}{P_Y}$

Yだけ消費： $y = \frac{I}{P_Y}$

Xだけ消費： $P_X \cdot x = I \Leftrightarrow x = \frac{I}{P_X}$

② 所得の変化による 予算制約線のシフト

所得増加 $I \uparrow$

平行移動

$\frac{P_X}{P_Y}$

$\frac{I}{P_X}$

③ 所得の変化による 消費の変化

$I \uparrow$ のケース

消費の変化

u1

証券アナリスト講義録	科目 経済	コース 1次基本	回数 2
------------	-------	----------	------

配布物	★ミニテスト：あり [] なし ★実力テスト：あり [] なし ◇配布物なし	★答 練：問題用紙・解答用紙・解答解説 ★その他のレジュメ []	講師 高久保 先生
-----	--	--------------------------------------	-----------

テキスト ページ	黒板 内 容
	④ 所得の増加と X財Y財の消費の変化 $I \uparrow \Rightarrow \begin{cases} A \rightarrow B \begin{cases} x \downarrow & \text{下級財} \\ y \uparrow & \text{上級財} \end{cases} \\ A \rightarrow C \begin{cases} x \uparrow & \text{上級財} \\ y \uparrow & \text{上級財} \end{cases} \\ A \rightarrow D \begin{cases} x \uparrow & \text{上級財} \\ y \downarrow & \text{下級財} \end{cases} \end{cases}$ ⑤ 需要の所得弾力性と財の分類 $\eta = \frac{\frac{\Delta x}{x}}{\frac{\Delta I}{I}} = \frac{\text{需要量の变化率}}{\text{所得の变化率}}$ ① 上級財 $I \uparrow \Rightarrow x \uparrow$ $\eta > 0$ ② 下級財 $I \uparrow \Rightarrow x \downarrow$ $\eta < 0$ 2 価格の変化と消費の変化 ① 価格の変化と最適消費点 ② 需要曲線

証券アナリスト講義録	科目 経済	コース 1次基本	回数 2
------------	----------	-------------	---------

配布物	★ミニテスト：あり [] なし ★実力テスト：あり [] なし ◇配布物なし	★答 練：問題用紙・解答用紙・解答解説 ★その他のレジュメ []	講師 高久保 先生
-----	--	--------------------------------------	--------------

テキスト ページ	黒板 内容
	③ 需要の価格弾力性 需要の 価格 弾力性 ϵ イプシロン $\epsilon = \left \frac{\frac{\Delta x}{x}}{\frac{\Delta p}{p}} \right$ 絶対値 需要量 の変化率 価格 の変化率 ④ 需要の価格弾力性 と需要曲線 3 代替効果と所得効果 (例題・第1章・③) 肢A $P_x \downarrow$ 代替効果 $\Rightarrow$ { X 割安 $\uparrow$ Y 割高 $\downarrow$ $\Downarrow$ 所得効果 $I \uparrow \Rightarrow$ { 上 $\uparrow$ 下 $\downarrow$ 肢B $P_y \downarrow$ 代替 $\Rightarrow$ { X (高) $\downarrow$ Y (安) $\uparrow$ $\Downarrow$ 所得 $I \uparrow \Rightarrow$ { 上 $\uparrow$ 下 $\downarrow$

証券アナリスト講義録	科目	経済	コース	1次基本	回数	2
------------	----	----	-----	------	----	---

配布物	★ミニテスト：あり [] なし ★実力テスト：あり [] なし ◇配布物なし	★答 練：問題用紙・解答用紙・解答解説 ★その他のレジュメ []	講師 高久保 先生
-----	--	--------------------------------------	-----------

テキスト ページ	黒板内容
	股C $P_x \uparrow \xRightarrow{\text{代替}} \begin{cases} X & \text{割高} \downarrow \\ Y & \text{割安} \uparrow \end{cases}$ $\Downarrow$ 所得 $I \downarrow \Rightarrow \begin{cases} \text{上} \downarrow \\ \text{下} \uparrow \end{cases}$ 股D $P_Y \uparrow \xRightarrow{\text{代替}} \begin{cases} X & \text{安} \uparrow \\ Y & \text{高} \downarrow \end{cases}$ $\Downarrow$ 所得 $I \downarrow \Rightarrow \begin{cases} \text{上} \downarrow \\ \text{下} \uparrow \end{cases}$ 4 最適労働供給 実質賃金 $\uparrow$ 名目賃金 (物価) $\nearrow$ 代替効果 $\begin{cases} \text{労働時間} \uparrow \\ \text{余暇} \text{割高} \downarrow \end{cases}$ $\searrow$ 所得効果 $\begin{cases} \text{労働時間} \downarrow \\ \text{余暇} \uparrow \end{cases}$ 代替効果 $>$ 所得効果 $\Rightarrow$ 労働時間 (総効果) $\uparrow$ 代替効果 $<$ 所得効果 $\Rightarrow$ 労働時間 (総効果) $\downarrow$

証券アナリスト講義録				科目	経済	コース	1次基本	回数	2
------------	--	--	--	----	----	-----	------	----	---

配布物	★ミニテスト：あり	[] なし	★答 練：問題用紙・解答用紙・解答解説	講師	高久保 先生
	★実力テスト：あり	[] なし	★その他のレジュメ		
	◇配布物なし				

テキスト ページ	黒板内容
	5 消費の2期間モデル ① 所得が現在と将来に存在するケース ② 所得が現在だけ存在するケース

証券アナリスト・1次レベル試験対策

経 済

—基本講義・第2回—

2013年8月2日（金曜日）

今回の学習のポイント

第1章 消費者行動の分析

- ☑ 所得の変化と需要量の変化
- ☑ 価格の変化と需要量の変化
- ☑ 最適労働供給
- ☑ 消費の2期間モデル

この補助資料は、講師が個人的に制作したものですので、欠席時などの資料請求は、講師に直接お申し付けください。各校舎の受付では、対応していませんのでご注意ください。

第1章 消費者行動の分析

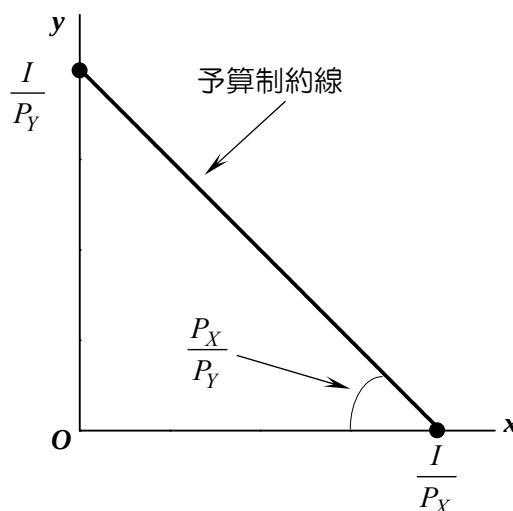
第3節 所得の変化と需要量の変化

1. 予算制約線と所得の変化

- **予算制約式**：X 財の消費量を x ，Y 財の消費量を y ，所得を I とし，また，X 財の価格を P_X ，Y 財の価格を P_Y とすると，予算制約式はつぎのように示される。

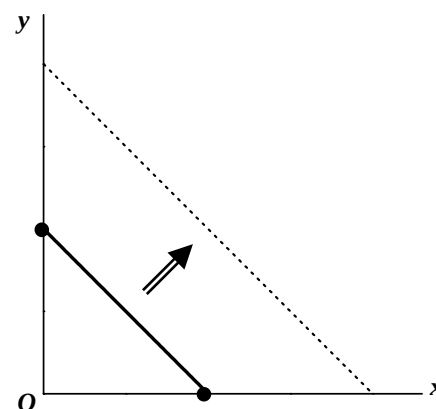
$$\underbrace{P_X \times x}_{\text{X 財への支出額}} + \underbrace{P_Y \times y}_{\text{Y 財への支出額}} = \underbrace{I}_{\text{所得}}$$

- **予算制約線**：横軸に X 財の消費量 x を，縦軸に Y 財の消費量 y をとった平面に，予算制約線を描く場合，横軸の切片は，所得 I のすべてを X 財の消費にあてたときの購入可能な X 財の数量 I/P_X となり，縦軸の切片は，所得 I のすべてを Y 財の消費にあてたときの購入可能な Y 財の数量 I/P_Y となる。



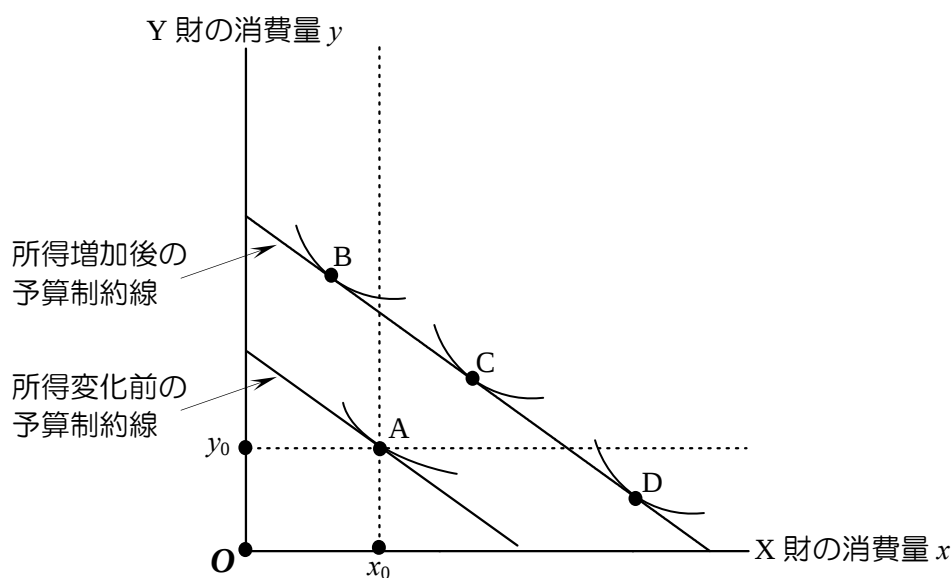
- **所得の変化による予算制約線のシフト**：所得が増加したとき，予算制約線は，右上方に平行移動する。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{横軸の切片：} \frac{I}{P_X} \uparrow \text{ (大きくなる)} \\ \text{縦軸の切片：} \frac{I}{P_Y} \uparrow \text{ (大きくなる)} \\ \text{直線の傾き：} \frac{P_X}{P_Y} \Rightarrow \text{ (変化しない)} \end{array} \right.$$



2. 所得変化と最適消費点：テキスト・32～34 ページ

- **所得の変化と予算制約線の移動**：所得（＝消費に利用可能な資金・資源）が増加するとき、予算制約線は右上方にシフトする。このことは、所得の増加により、消費可能な領域が拡大することを意味する。
- **予算制約線の移動と最適消費点**：最適消費点は、予算制約線と無差別曲線との接点となるので、予算制約線が移動すると最適消費点も移動後の予算制約線上に移動する。このことは、所得の増加により、2財（X財とY財）の需要量（消費量）が変化することを意味する。



最適消費点の移動と2財の消費量の変化をみてみると…

- **最適消費点がA点からB点に移動した場合**：所得の増加により、X財の消費量は x_0 よりも減少し、同時に、Y財の消費量は y_0 よりも増加する。
- **最適消費点がA点からC点に移動した場合**：所得の増加により、X財の消費量は x_0 よりも増加し、同時に、Y財の消費量は y_0 よりも増加する。
- **最適消費点がA点からD点に移動した場合**：所得の増加により、X財の消費量は x_0 よりも増加し、同時に、Y財の消費量は y_0 よりも増加する。

3. 需要の所得弾力性と財の分類：テキスト・33・35 ページ

- **需要の所得弾力性**：所得が 1%変化したときに需要量が何%変化するかを示す指標のこと。需要の所得弾力性 η （イータ）は、つぎのように定義される。

$$\eta = \frac{\frac{\Delta x}{x}}{\frac{\Delta I}{I}} \quad \left[\frac{\Delta I}{I} : \text{所得の変化率}, \frac{\Delta x}{x} : \text{需要量の変化率} \right]$$

- **上級財（正常財）**：所得が増加したとき消費量が増加し、所得が減少したとき消費量が減少する財のこと。上級財（正常財）の需要の所得弾力性は、 $\eta > 0$ （プラス）となる。なお、上級財は（正常財）は、さらに、「必需品」と「奢侈品（ぜいたく品）」に分類される。
 - ⊕ **必需品**：所得が増加したとき消費量が増加するが、所得の増加率ほど消費量は増加しないため、必需品の需要の所得弾力性は、 $0 < \eta < 1$ となる。
 - ⊕ **奢侈品（ぜいたく品）**：所得が増加したとき、その所得の増加率よりも大きく消費量が増加するため、奢侈品（ぜいたく品）の需要の所得弾力性は、 $\eta > 1$ となる。
- ☑ **確認！**：需要の所得弾力性が $\eta = 1$ のときは、「必需品」と「奢侈品」のどちらでもない、たんなる「上級財（正常財）」として分類される。
- **下級財（劣等財）**：所得が増加したとき消費量が減少し、所得が減少したとき消費量が増加する財のこと。下級財（劣等財）の需要の所得弾力性は、 $\eta < 0$ （マイナス）となる。
- **上級財と下級財の関係**：ある財が下級財であるためには、かならず、それと代替する上級財が同時に存在しなければならない。たとえば、「牛肉」しか存在しないとき、「牛肉」はかならず上級財となる。これに対して、牛肉を産地別に区別して、「松阪牛」と「オーギービーフ」の2財が存在するとき、所得が増加するにつれて、「オーギービーフ」から「松阪牛」に需要が移る（代替する）場合、「オーギービーフ」が下級財となり、「松阪牛」が上級財となる。このように、2財（X財とY財）だけを消費の対象と想定する場合、X財とY財の両方とも下級財になることはない。

4. 所得の変化と消費の変化に関する過去の出題例

平成24年(秋)・第1問Ⅰ・問2：(例題・第1章・②)：消費者行動に関する次の記述のうち、正しいものはどれですか。

- A ある財の価格が上昇したとき、代替効果はその財の需要を増やす。
- B 所得が増加すると、各財の消費量は必ず増加する。
- C 所得効果が正のときは、需要の所得弾力性は常に1より大きい。
- D 必需品のほうが嗜好品よりも、需要の所得弾力性は小さい。

解法のポイント

- ☑ **選択肢 A**：ある財の価格が上昇したとき、代替効果はその財の需要を減少させる。
「代替効果」については、この後の学習項目を参照のこと。
- ☑ **選択肢 B**：所得が増加すると、上級財であればその消費量は増加し、下級財であればその消費量は減少する。
- ☑ **選択肢 C**：「所得効果が正」とは、所得が増加するとき消費量も増加する上級財（正常財）を意味する。このため、所得効果が正のときは、需要の所得弾力性は0より大きくなる（＝上級財の需要の所得弾力性はプラスとなる）。
- ☑ **選択肢 D**：需要の所得弾力性 η は、必需品の場合 $0 < \eta < 1$ となり、嗜好品（奢侈品）の場合 $\eta > 1$ となる。このため、必需品のほうが嗜好品よりも、需要の所得弾力性は小さくなる。

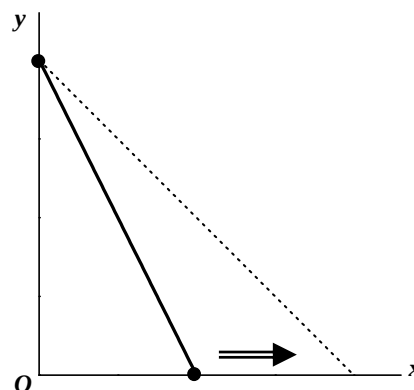
解答：D

第4節 価格の変化と需要量の変化

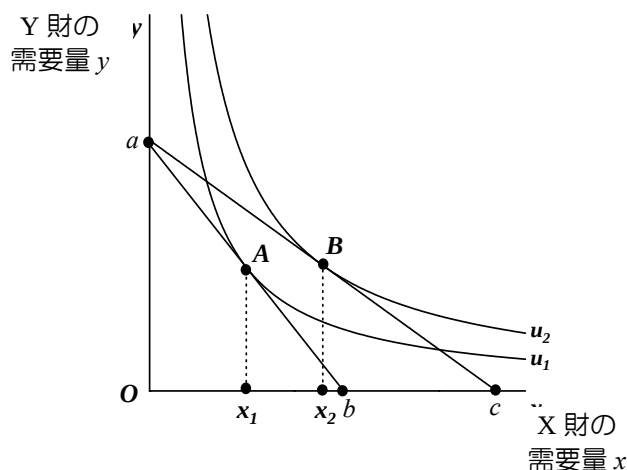
1. 価格の変化と需要曲線：テキスト・36・37 ページ

- **財の価格変化による予算制約線のシフト**：X 財の価格が低下したとき、予算制約線の横軸の切片は右方に移動するが、縦軸の切片は変化しない。

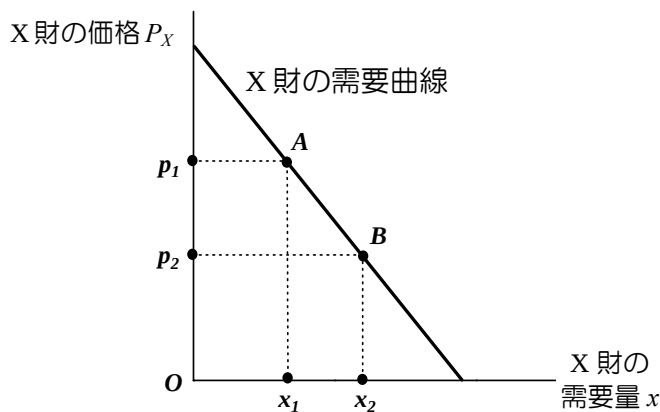
$$\left\{ \begin{array}{l} \text{横軸の切片：} \frac{I}{P_X} \uparrow \text{ (大きくなる)} \\ \text{縦軸の切片：} \frac{I}{P_Y} \Rightarrow \text{ (変化しない)} \end{array} \right.$$



- **需要関数（曲線）**：消費者の効用が最大となる価格と需要量との関係のこと。



X 財の価格の変化と X 財の需要量の変化だけをとらえると、X 財の需要曲線が得られる。

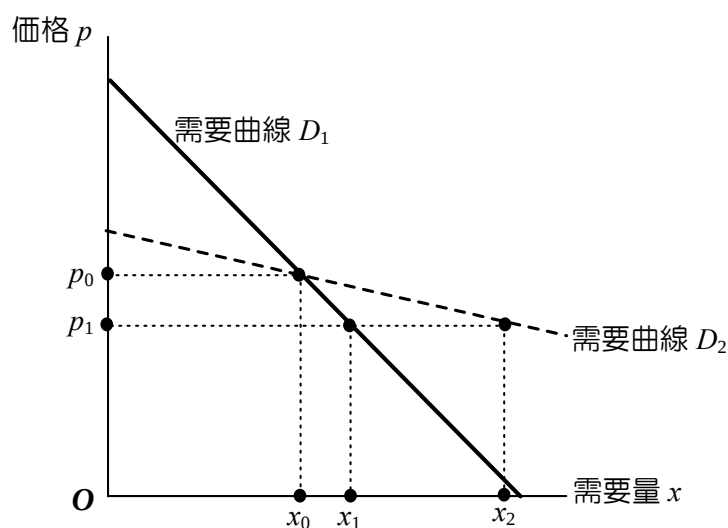


2. 需要曲線の傾きと需要の価格弾力性：テキスト・38・39 ページ

- **需要の価格弾力性**：価格が 1%変化したときに需要量が何%変化するかを示す指標のこと。需要の価格弾力性 ε （イプシロン）は、つぎのように定義される。

$$\varepsilon = \left| \frac{\frac{\Delta x}{x}}{\frac{\Delta p}{p}} \right| \quad \left[\frac{\Delta p}{p} : \text{価格の変化率}, \frac{\Delta x}{x} : \text{需要量の変化率} \right]$$

- **需要曲線の傾きと需要の価格弾力性**：価格が p_0 から p_1 に低下したとき、需要曲線 D_1 のもとでは需要量は x_0 から x_1 に増加する。一方、需要曲線 D_2 のもとでは需要量は x_0 から x_2 に増加する。このことは、需要曲線 D_1 よりも傾きが緩やかな（＝水平に近い）需要曲線 D_2 のほうが需要の価格弾力性が大きくなることを示している。



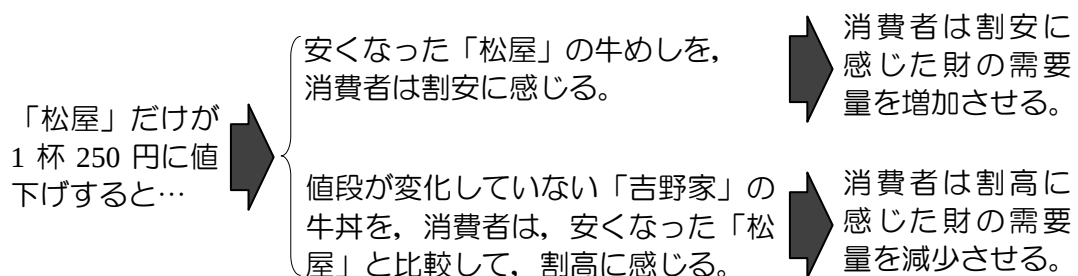
3. 総効果と代替効果・所得効果との関係：テキスト・41 ページ

- **価格が変化すると、需要量はどのように変化するのだろうか？**：2 財（X 財と Y 財）だけを対象とした消費の世界において、一方の財の価格だけが変化したとき、各財の需要量はどのように変化するだろうか？ このことを詳細にとらえるのが総効果から代替効果・所得効果への分解である。
- **総効果**：ある財の価格が変化したとき、消費者の予算制約線はシフトし、最適消費点が移動し、2 財の各需要量は変化する。この需要量の変化を「総効果」という。
- **代替効果と所得効果**：「総効果」を 2 つの独立した効果に分解したものが「代替効果」と「所得効果」となる。

$$\text{総効果} = \text{代替効果} + \text{所得効果}$$

4. 代替効果：テキスト・42 ページ

- **財の価格の変化と代替効果**：代替効果とは、「割高」な財から「割安」な財への消費の代替のこと。2 財（X 財と Y 財）だけを対象とした消費の世界において、一方の財の価格だけが変化したとき、消費者は、2 財のうち一方を「割安」に感じ、もう一方を「割高」に感じるようになる。そして、「割高」な財の需要量を減少させ、その代わり、「割安」な財の需要量を増加させる。
- **例：「松屋」だけが安くなると需要量はどう変化するか？**：「吉野家」と「松屋」の牛丼（牛めし）の並丼がともに 1 杯 400 円だったとする。このとき、「松屋」だけが並丼を 1 杯 250 円に値下げしたとすると、代替効果によって、「吉野家」と「松屋」の牛丼（牛めし）の需要量はどのように変化するだろうか？



5. 所得効果：テキスト・43 ページ

- **財の価格の変化と所得効果**：所得効果とは、価格の変化を実質的な所得の変化とみなすこと。所得が実質的に変化すると（実際の所得の金額が変化しなくても）、2 財（X 財と Y 財）がそれぞれ上級財か下級財かによって、各財の需要量は変化する。
 - ⊕ **財の価格が上昇した場合**：所得の減少とみなし、それによって、上級財であればその需要量は減少し、下級財であればその需要量は増加すると考える。
 - ⊕ **財の価格が低下した場合**：所得の増加とみなし、それによって、上級財であればその需要量は増加し、下級財であればその需要量は減少すると考える。
- ☑ **注意！**：「所得効果」には、「代替効果」による需要量の変化は関係ない。

6. ギッフェン財：テキスト・40 ページ

- **ギッフェン財**：価格が上昇（低下）したとき、消費量が増加（減少）する財のこと。
 - ⊕ **ギッフェン財の例**：マッチ売りの少女は、所得がとても少ないために、しかたなく、安いパンの耳だけを消費していたとする。もしもパンの耳の価格が低下すると、少し所得に余裕ができる。このとき、かえてパンの耳の消費量を減らし、そのかわり、たまにはソーセージを買って食べようとした場合、パンの耳は、その価格が低下すると、その需要量も減少する「ギッフェン財」ととらえられる。
- **ギッフェン財の性質**：ギッフェン財であれば、かならず下級財となる。また、ギッフェン財に関して、代替効果・所得効果をみると、所得効果による変化が代替効果による変化を上回る。
 - ⊕ **代替効果**：「パンの耳」の価格の低下により、マッチ売りの少女は、「パンの耳」を、いままでよりも割安に感じ、「パンの耳」の消費量をふやそうとする。
 - ⊕ **所得効果**：「パンの耳」の価格の低下により、実質的に所得に余裕ができたマッチ売りの少女は、たまにはソーセージを買おうとして、かえて「パンの耳」の消費量をへらそうとする。
 - ⊕ **総効果**：「パンの耳」がギッフェン財のとき、「パンの耳」の価格の低下によって、その実際の消費量は減少する。これは、「代替効果」での消費量の増加を、「所得効果」での消費量の減少が上回っているためと考えられる。

7. 代替効果と所得効果に関する過去の出題例

平成23年(春)・第1問・問5：(例題・第1章・③)：X財，Y財の価格変化の影響に関する次の記述のうち，正しいものはどれですか。

- A X財価格のみが低下したとき，X財需要が減少したならば，X財は劣等財である。
- B Y財価格のみが低下したとき，X財需要が減少したならば，X財は正常財である。
- C X財価格のみが上昇したとき，X財が正常財ならば，X財需要は増加する。
- D Y財価格のみが上昇したとき，X財が劣等財ならば，X財需要は減少する。

解法のポイント

- ☑ **選択肢A**：X財価格のみが低下したとき，X財需要が減少するのは，X財が「ギッフェン財」の場合であり，「ギッフェン財」は劣等財（＝下級財）である。
- ☑ **選択肢B**：Y財価格のみが低下したとき，X財が正常財か劣等財かに関係なく，X財の需要量は代替効果により減少するため，総効果でも減少する可能性がある。
- ☑ **選択肢C**：X財価格のみが上昇したとき，X財の需要量は，代替効果により減少し，X財が正常財ならば，所得効果でも減少するので，X財需要が増加することはない。
- ☑ **選択肢D**：Y財価格のみが上昇したとき，X財の需要量は，代替効果により増加し，X財が劣等財ならば，所得効果でも増加するので，X財需要が減少することはない。

解答：A

平成24年(春)・第1問Ⅰ・問2：(例題・第1章・④)：X, Yの2財に関する消費選択問題を考える。X財価格の上昇によって生じる需要変化に関する次の記述のうち、常に正しいものはどれですか。

- A X財が劣等財の場合、X財への需要は減少する。
- B Y財が正常財の場合、Y財への需要は増加する。
- C X財が劣等財の場合、Y財への需要は減少する。
- D Y財が劣等財の場合、Y財への需要は増加する。

解法のポイント

- ☑ **選択肢A**：X財価格が上昇するとき、X財の需要は、代替効果により減少し、X財が劣等財の場合、所得効果により増加するため、X財の需要の増減は不明となる。
- ☑ **選択肢B**：X財価格が上昇するとき、Y財の需要は、代替効果により増加し、Y財が正常財の場合、所得効果により減少するため、Y財の需要の増減は不明となる。
- ☑ **選択肢C**：X財が劣等財の場合、Y財は正常財となり、**選択肢B**と同じ状況となる。
- ☑ **選択肢D**：Y財が劣等財の場合、Y財への需要は、所得効果によっても増加する。

解答：D

第5節 最適労働供給

1. 最適労働供給における代替効果・所得効果：テキスト・47～53 ページ

- **賃金率とは**：労働時間1単位あたりの賃金のこと。「時給」のことと考えればよい。「労働」における価格にあたる。
 - ⊕ **名目賃金（率）**：金額で示した賃金のこと。「時給 1,000 円」でアルバイト募集といった場合の時給は名目賃金に相当する。
 - ⊕ **実質賃金（率）**：数量で示した賃金のこと。名目賃金を物価で割って求めることができる。実質賃金は、たとえば、1時間働いてパンが何個得られるか、といった労働から得られる数量を示す。実質賃金が増えたときに、労働供給（＝労働時間）が増えると考えられる。

- **実質賃金率の上昇と労働時間**：実質賃金率が増えたとき、限られた時間（たとえば1日）のうち、労働時間と余暇（＝労働していない時間）と、どちらを増加させるかは、代替効果と所得効果によって決まる。
 - ⊕ **代替効果**：実質賃金率の上昇は余暇を割高にするので、労働時間を増加させる。
 - 実質賃金率（＝実質的な時給）が上がれば、余暇を過ごすことは高い時給を振ることを意味するので、余暇が割高になり、余暇を減少させる。そのため、労働時間が増加する。
 - ⊕ **所得効果**：実質賃金率の上昇は所得を増加させるので、労働時間を減少させる。
 - お金に余裕があれば、無理して働かなくてよいわけだから、実質賃金率（＝実質的な時給）が上がって実質的な所得が増加すれば、余暇を増加させる。そのため、労働時間が減少する。

- **実質賃金の上昇と労働時間の変化**：実質賃金が増えたとき、労働時間が増えるか、減るかは、代替効果と所得効果のどちらが大きいかに依存する。
 - ⊕ **実質賃金の上昇によって労働時間が増加するケース**：実質賃金が増えたとき、代替効果が所得効果を上回っていれば、総効果として労働時間は増加する。

$$\text{代替効果} (\uparrow \uparrow) + \text{所得効果} (\downarrow) = \text{労働時間} (\uparrow)$$
 - ⊕ **実質賃金の上昇によって労働時間が減少するケース**：実質賃金が増えたとき、所得効果が代替効果を上回っていれば、総効果として労働時間は減少する。

$$\text{代替効果} (\uparrow) + \text{所得効果} (\downarrow \downarrow) = \text{労働時間} (\downarrow)$$

2. 最適労働供給に関する過去の出題例

平成19年（春）・第1問・問2：（例題・第1章・⑤）：賃金と労働供給に関する次の記述のうち、正しいものはどれですか。

- A 実質賃金の増加は必ず労働供給を増加させる。
- B 名目賃金が低下すると、労働供給は必ず減少する。
- C 実質賃金の変化と、労働供給は無関係である。
- D 名目賃金が増加した場合でも、労働供給は減少する場合がある。

解法のポイント

- ☑ **選択肢 A**：実質賃金が上昇しても、所得効果の方が大きくなる場合もあるので、労働供給（＝労働時間）がふえるとは限らない。
- ☑ **選択肢 B**：労働供給において重要なのは、名目賃金ではなく、労働によって得られる財・サービスの数量をあらわす実質賃金である。
- ☑ **選択肢 C**：実質賃金の変化によって、労働供給は変化すると考えられる。
- ☑ **選択肢 D**：名目賃金が増加した場合、実質賃金は増加する場合と、減少する場合がある。

解答：D

平成18年（春）・第1問・問13：（例題・第1章・⑥）：賃金と労働供給に関する次の記述のうち、正しいものはどれですか。

- A 名目賃金の増加は労働供給を必ず増加させる。
- B 実質賃金が増加した場合でも、名目賃金が低下すると労働供給は減少する。
- C 実質賃金の変化と、労働供給は無関係である。
- D 実質賃金が増加した場合でも、労働供給が減少する場合がある。

解法のポイント

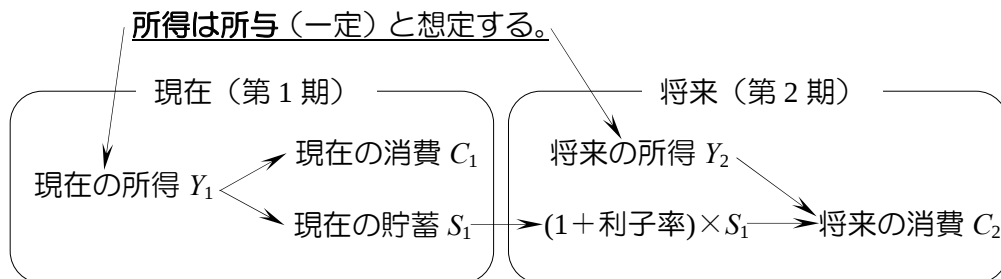
- ☑ **選択肢 A・B**：名目賃金の変化によっては、労働供給は変化しない。
- ☑ **選択肢 B・C・D**：実質賃金が増加した場合でも、労働供給は、減少する場合も、増加する場合もあり、代替効果と所得効果のはたらきによって異なってくる。

解答：D

第6節 消費の2期間モデル

1. 消費の2期間モデルにおける基本パターン：テキスト・54～58 ページ

- **現在（第1期）**：現在の所得 Y_1 が利用でき、これを消費 C_1 と貯蓄 S_1 に支出する。
- **将来（第2期）**：将来の所得 Y_2 と、現在の貯蓄 S_1 および利率 r のもとでの貯蓄に対する利息 $r \times S_1$ が利用でき、これらを将来に、すべて消費 C_2 として支出する。



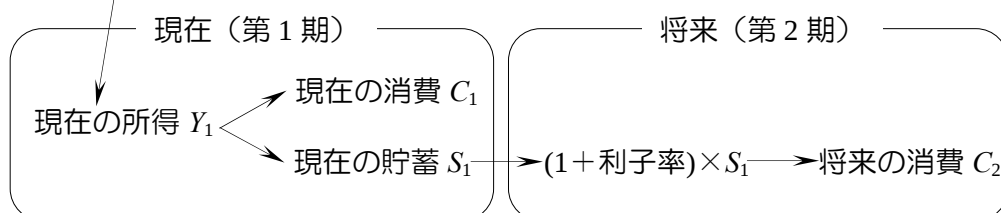
現在と将来の2期間全体の予算制約を求めると…

- **2 期間全体の予算制約**：2 期間全体の予算制約は、つぎのように示される。

$$C_1 + \underbrace{\frac{1}{1+r} \times C_2}_{\text{将来の価格を1円とした将来財の割引現在価値}} = \underbrace{Y_1 + \frac{1}{1+r} \times Y_2}_{\text{2 期間にわたる所得全体の割引現在価値}}$$

- **現在（第1期）において借入をする消費者の場合**：現在において消費者が借入をしている場合、現在（第1期）において $S_1 (= Y_1 - C_1)$ がマイナスとなる。このとき、現在（第1期）では、 S_1 だけ消費に利用できる資金・資源が増加する。一方、将来（第2期）では、消費者は元本 S_1 とその利息 $r \times S_1$ の返済が必要となり、その分、将来の消費は減少する。
- **所得が現在（第1期）にしかない場合**：将来（第2期）では、現在の貯蓄 S_1 および利率 r のもとでの貯蓄に対する利息 $r \times S_1$ だけが利用でき、これをすべて将来の消費 C_2 として支出する。このため、所得が現在にしかない場合には、消費者が現在において借入をすることはない。

所得は所与と想定する。



2. 利率の低下と消費の変化：テキスト・59 ページ

- **利率の低下の効果**：利率の低下は、価格や所得につぎのような影響をあたえる。
 - ⊕ **将来財の相対的な価格の変化**：利率 r の低下は、将来の価格を 1 円とした将来財の割引現在価値 $\frac{1}{1+r}$ を上昇させるので、将来財の現在財に対する相対的な価格を上昇させる。
 - ⊕ **貯蓄主体と実質的な所得の変化**：現在において消費者が $s_1 (>0)$ だけ貯蓄をしている場合、利率 r の低下は、将来における利息 $r \times s_1$ の受取を減少させるので、実質的な所得の減少となる。
 - ⊕ **借入主体と実質的な所得の変化**：現在において消費者が $s_1 (<0)$ だけ借入をしている場合、利率 r の低下は、将来における利息 $r \times s_1$ の支払いを減少させるので、実質的な所得の増加となる。

利率の低下による代替効果と所得効果はどうなるか？

- **代替効果**：利率の低下により、割高な将来財の消費から割安な現在財の消費への代替がおこる。このため、現在の消費を増加させ、将来の消費を減少させる。
- **所得効果**：消費者が貯蓄主体か借入主体かにより、さらに、消費者にとって現在財と将来財がそれぞれ上級財か下級財かにより、所得効果による消費の変化は異なる。

利率の低下による総効果（＝代替効果＋所得効果）を整理すると…

- ① **現在消費が増加するケース**：貯蓄主体の場合、現在貯蓄が減少し、利率の低下により将来の利息の受取も減少するので、将来消費は減少する。一方、借入主体の場合、現在の借入が増加するが、利率の低下により将来の利払いは減少するので、将来消費は増加する場合と減少する場合と変化しない場合がある。
- ② **現在消費が減少するケース**：貯蓄主体の場合、現在貯蓄が増加するが、利率の低下により将来の利息の受取は減少するので、将来消費は増加する場合と減少する場合と変化しない場合がある。一方、借入主体の場合、現在の借入が減少し、利率の低下により将来の利払いも減少するので、将来消費は増加する。
- ③ **現在消費が変化しないケース**：貯蓄主体の場合、現在貯蓄が一定であり、利率の低下により将来の利息の受取は減少するので、将来消費は減少する。一方、借入主体の場合、現在の借入が一定で、利率の低下により将来の利払いが減少するので、将来消費は増加する。

3. 消費の2期間モデルに関する過去の出題例

平成21年（春）・第1問・問7：（例題・第1章・⑦）：現在と将来の二時点からなり、各時点に1種類の財のみがある不確実性のない経済を考える。この経済に、現在においてのみ $W(>0)$ の所得を持つ消費者が、無リスク利子率の下、最適な消費経路を選んでいるとする。いま、利子率が r から r' に下落したとする。このとき、他の条件を一定として、最適な消費経路の変化について起こり得ないものはどれですか。

- A 現在の最適消費は増加し、将来の最適消費は減少する。
- B 現在の最適消費は減少し、将来の最適消費は増加する。
- C 現在の最適消費は変化せず、将来の最適消費が減少する。
- D 現在の最適消費は変化せず、将来の最適消費は増加する。

解法のポイント

- ☑ **現在だけ所得がある消費者**：借入とは将来の所得を担保にして現在資金を借りることを意味する。このため、現在においてだけ所得があり、将来に所得がない消費者は、借入主体になることはできない。
- ☑ **選択肢 A**：利子率が r から r' に下落したとき、貯蓄主体が現在の最適消費を増加させ、現在の貯蓄を減少させれば、将来利用できる資金は減少するため、将来の最適消費は減少する。
- ☑ **選択肢 B**：利子率が r から r' に下落したとき、貯蓄主体が現在の最適消費を減少させ、現在の貯蓄を増加させれば、将来利用できる資金が増加する可能性がある。将来利用できる資金が増加すれば、将来の最適消費は増加する。
- ☑ **選択肢 C・D**：利子率が r から r' に下落したとき、貯蓄主体が現在消費を一定に保つ（＝現在の貯蓄を一定に保つ）ならば、利子率の低下により将来の利息が減少するので、将来利用できる資金が減少し、将来消費はかならず減少する。

解答：D

平成21年(秋)・第1問・問7：(例題・第1章・⑧)：現在と将来の2時点からなり、各時点に1種類の財のみがある不確実性のない経済を考える。この経済において、現在のみ所得を持つ消費者が、最適な消費経路を選んでいるとする。いま利子率が下落したなら、他の条件を一定として、予算制約のもとで選択可能な将来消費の最大量と最適な将来消費はどのように変化しますか。代替効果が所得効果に対して支配的であるとして答えること。

- A 消費の最大量は減少し、最適消費も減少する。
- B 消費の最大量は減少し、最適消費は増加する。
- C 消費の最大量は増加し、最適消費も増加する。
- D 消費の最大量は増加し、最適消費は減少する。

解法のポイント

- ☑ **現在だけ所得がある消費者**：現在だけ所得がある消費者は、現在において正の貯蓄をおこない、将来においては、現在の貯蓄とその貯蓄から得られる利息との合計が消費に利用できる資金・資源となる。このため、利子率の下落は、将来に受けとる利息を減少させるので、将来に利用可能な資金・資源(＝消費の最大量)を減少させる。
- ☑ **利子率の下落と代替効果**：利子率の低下により、割高な将来財の消費から割安な現在財の消費への代替がおこる。このため、現在の消費は増加し(＝現在の貯蓄は減少し)、将来の消費は減少する。

解答：A